A magazine about Shimane Prefecture, Japan

梦之港

Vol.45

たたら

この冬、ペーパーナイフを使おうと思ったのは
鉄を超えて地域を支える——たたら製鉄と田部家の物語
菅谷たたら高殿で、歴史の響きに耳を澄ます

TATARA

给重拾拆信刀一个理由
在制铁精神的传承中支撑地区社会—达达拉制铁与田部家族的故事
在菅谷达达拉高殿聆听历史的回响

给重拾拆信刀一个理由

郭小轩

元旦期间的云南市吉田町下了一场大雪，积雪最深处接近一米。我们抵达时，田地仍被白雪覆盖，狭窄的山路上既无脚印，也不见来往车辆。冰刀般的寒风迎面吹来，把人的脸颊和鼻尖冻得通红。正是在这个寂静而严寒的地方，仍保留着电影《幽灵公主》中炼铁工坊场景的原形。

这一带曾分布着多间带有神秘色彩的炼铁工坊，人们采用被称为“踏踏拉（たたら，又译作‘吹踏鞴’）制铁”的传统工艺，将砂铁与木炭送入炉中，在持续三日的送风与看火中，炼成名为“玉钢”的合金。这种极度消耗人力与自然资源的工艺，曾在时代洪流中一度停滞；却因作为日本刀不可替代的原料生产方式而得以延续，凝结着匠人代代相传的坚持。

我们此行的目的之一，是探访踏踏拉锻冶工坊，并体验用一枚普通的五寸钉制作拆信刀。在小林老师的带领下，钉子在炉火中逐渐变为橙红色，随即在铁锤的敲击下延展成形。火光摇曳，敲击声有节奏地回荡，时间仿佛也放慢了脚步。老师对我们做的每一把拆信刀都反复检查、细致打磨，像对待艺术作品一般。他的衣服上，布满被火星烫出的痕迹。

每年来到这里的体验者约有百人，他们来自不同年龄层，最高龄者甚至超过八十岁，其中也包括女性与外国友人。完成

この冬、ペーパーナイフを使おうと思ったのは

郭小軒

正月前後の雲南市吉田町は大雪に包まれ、私たちが到着した時も、田畑は一面の雪景色となっていた。細い山道には足跡もなく、行き交う車の姿もない。刃物のような冷たい風が頬や鼻先を刺す。映画『もののけ姫』に登場する製鉄場のモデルとなった場所が、今もこの静寂と厳寒の地に残されている。

この地域ではかつて、「謎の鉄づくり」とも呼ばれる「たたら製鉄」が行われてきた。砂鉄と木炭を炉に入れ、三日にわたって送風と火の管理を続けながら鉄を精錬する伝統技法である。膨大な労力と自然資源を要するこの工法は、時代の変化とともに一度は途絶えかけたが、日本刀の原料となる「玉鋼」を生み出すために、職人たちの手によって受け継がれてきた。

今回の訪問では、たたら鍛冶工房を見学するとともに、一本の五寸釘からペーパーナイフを作る体験を行った。小林さんの指導のもと、釘は炉の中で橙色に染まり、槌で打たれることで少しずつ形を変えていく。揺れる火と規則正しい打撃音に包まれると、時間の流れがゆるやかに感じられた。小林さんは一本一本を丁寧に確認し、細部まで磨き上げていく。その作業着には、火の粉で焼けた無数の跡が残っていた。

工房には、年間およそ100人の幅広い年齢層の体験者が訪れ、女性や外国人の姿もある。完成したペーパーナイフには防錆処理が施され、日常の中で実際に使える道具として手元に残る。

まだ余熱の残るペーパーナイフに触れながら、私は、自分が長い間、手紙を書いていないことに気づいた。社会に出てから、手紙を書くという習慣はいつの間にか生活の中から遠ざかっていた。「消費のダウングレード」が繰り返し語られる現在、生活における儀式性は、あってもなくてもよい贅沢のように受け取られがちである。しかし、効率だけを追い求め、「必要なもの」だけを選び続けた先に、私たちの生活はどこまで豊かであり続けられるのだろうか……

小林さんによれば、釘からペーパーナイフを作る工程は、鍛造技術を身につけるための基礎的な練習の一つでもあるという。広島出身の「被爆二世」であり、刀鍛冶の見習いでもある小林さんは、鉄の歴史と技の継承を語ることを通して、対立ではなく、学びと創造を選ぶことの大切さを語っていた。

『もののけ姫』の世界とは異なり、現実の製鉄や鍛造は、かつては男性が担ってきた分野であった。しかし現在では、女性が見習いとして作刀の世界に足を踏

踏踏拉锻冶工坊
たたら鍛冶工房

锻造后的拆信刀还会进行防锈处理，确保其能在日常生活中被真正使用。

触摸着仍带余温的拆信刀，我忽然意识到，自己已经很久没有手写过信，也没有收到过值得用拆信刀拆封的信件。一位朋友曾调侃，称明信片是“最鸡肋的存在”。而我自己，也在进入社会后，几乎彻底告别了写信的习惯。在“消费降级”被反复提及的当下，生活中的仪式感，似乎成了一种可有可无的奢侈。

然而，如果只追求效率，只留下“必要”的选择，我们的生活是否也会逐渐失去精神的余地？拆信刀本身或许并非必需，却提醒人们：在日常之中，仍可以保留与时间、与他人认真相遇的方式。

据小林老师介绍，用钉子制作拆信刀也是刀匠练习锻造技艺的入门方式之一。来自广岛、作为“核爆二代”的他，同时也是日本刀刀匠学徒。他希望通过讲述铁的历史与技艺的传承，让更多人理解远离冲突、选择学习与创造的意义。

不同于《幽灵公主》中的场景，现实中的炼铁与锻造在过去多由男性承担；而如今，已有女性作为学徒踏入这一领域。时代在变化，但人与火、铁之间建立起来的关系，仍在以新的方式延续。

或许，我们不一定需要一把拆信刀来打开信封。但在亲手制作它的过程中，我们重新触摸了时间的重量。正是这些看似“无用”的手工与仪式感，让文化走出历史，回到被使用、被记住的日常之中。

公益财团法人铁之历史村地域振兴事业团 和钢开发系研究院 小林宪生老师
公益財団法人鉄の歴史村地域振興事業団 和鋼開発係研究員 小林憲生さん

み入れる例も見られる。時代は移り変わっていくが、人と火、そして鉄との関係は、新たなかたちで静かに受け継がれている。

確かに、ペーパーナイフはなくても困らない。しかし、それを自らの手で作る過程を通じて、時間の重みを確かに感じ取ることができる。こうした手仕事とささやかな儀式性こそが、文化を歴史の中に閉じ込めるのではなく、使われ、記憶される日常へそっと連れ戻してくれるのではないだろうか。

在制铁精神的传承中支撑地区社会
—达达拉制铁与田部家族的故事

Bianca Chan

达达拉制铁以砂铁为原料，并使用粘土炉制铁，是日本自古流传下来的传统制铁技术。此技术需要高度精湛的技艺和长期积累的经验，制成的铁品质高，适用于制作农具、生活用具以及刀剑，长期以来支撑着武士文化的发展。

在明治时期引入近代高炉制法之前，日本国内制铁的约七成产自中国地区。其中在岛根县奥出云地区，被称为“达达拉三大家族”的田部家族、樱井家族及丝原家族，曾承担全国约四成的制铁量。其中最核心的当属田部家族。田部家族自室町时代开始从事制铁产业，在三大家族中因制铁历史最久而为人熟知。

这次我们走访了田部家族的据点—云南市吉田町，为了深入了解田部家族，在云南市观光志愿者导游吉川先生的带领下，聆听了很多关于田部家族的故事。

鉄を超えて地域を支える——たたら製鉄と田部家の物語

ビアンカ・チャン

たたら製鉄は、砂鉄を原料に粘土製の炉で鉄を生み出す、日本に古くから伝わる製鉄法です。高度な技と長い経験を要するこの方法によって生み出される鉄は品質が高く、農具や生活道具をはじめ、刀剣などを通じて武士文化を支えてきました。

明治期に近代的な高炉が導入されるまで、日本国内で生産される鉄のおよそ7割は中国地方で生産されていました。なかでも島根県奥出雲地方では、「たたら御三家」と呼ばれる田部家・桜井家・絲原家の三家が、全国の鉄生産量の約四割を担っていました。その中心的存在が田部家です。田部家は室町時代から鉄の生産に携わり、御三家の中でも最も古い歴史を持つ家として知られています。

今回は、田部家が拠点を置く雲南市吉田町を訪れ、田部家についてより深く知るため、雲南市観光ボランティアガイドの吉川さんに案内していただきながら、田部家の歴史にまつわる多くのエピソードを伺いました。

まず、田部家の特徴の一つが、代々受け継がれてきた名前と称号です。九代当主・安右衛門の時代には、「鉄山益々繁昌、金銀如山、米穀満庫」と記されるほど、たたら製鉄による大きな繁栄を遂げました。この言葉は、経済的成功のみならず、地域社会の安定と豊かさを象徴するものでもあります。こうした功績が認められ、田部家は十代当主の代に松江藩より「長右衛門」の名を賜りました。以後、歴代当主の多くが「田部長右衛門」を名乗り、この名は個人を示すものではなく、製鉄経営や土地管理、地域を支える重責を象徴する称号として、代々受け継がれてきました。

また、1874年には第21代当主が私財を投じて私立田部小学校を設立し、近代的な学校制度が十分に整う以前から、地域の子どもたちに学びの機会を提供しました。これは、産業の発展にとどまらず、人材育成と知の継承を重視していた田部

田部家族的一大特征是田部家族世代承袭的名号。田部家族第九代掌门人安右卫门时期，正如“铁山日益繁盛，金银如山，米谷满仓”所描述的那样，达达拉制铁推动了巨大繁荣。这句话不仅描述了经济上的成功，也反映了当时社会的安定与富足。这份功绩受到了认可，田部家族第十代掌门人得到松江藩主的赐名—长右卫门。从这以后，历代掌门人中的大多数继承了田部长右卫门的名号，这个世代传承至今的名号不仅是个人称谓，更象征着制铁经营、土地管理以及支撑地区社会等重大责任。

1874年，田部家族第21代掌门人投入个人资产用于建设私立田部小学，在近代学校制度还未完善之前，这个地区的孩子们已经有了上学的机会。这体现了田部家族在推动产业发展的同时，也很重视人才培养和知识传承的地区责任意识。

另外，在一场火灾中当自家宅院和周边区域被大火吞噬时，田部家族选择暂缓自家宅院的重建，优先地区复兴。因此和樱井家族与丝原家族比起来，田部家族的宅院显得质朴很多。从现存的田部家族旧仓库建筑群中仍能看出田部家族优先考虑地区安定和复兴的价值观。

达达拉精神，在地区风俗中依然根深蒂固。田部家族近350年来每逢正月都会举行具有本地特色的捣年糕仪式。捣年糕的过程不用手直接接触年糕，也不使用手水，全部使用道具完成。这是因达达拉制铁不喜湿气和水分的特点而来。

伴随着自古吟唱至今的捣年糕歌谣和响亮的口号声，木杵上下起落间，五斗五升的年糕被制作好了。重视洁净与珍视原材料的态度与达达拉制铁精神一脉相承，并在这项风俗中传承下来。

距离达达拉的火焰熄灭已经过去了100年。为了让曾一度消逝的达达拉文化传承下去，并让曾因达达拉繁荣过的土地再度换发光彩，田部家族开启了在现代复兴达达拉精神的实践。

2021年，田部集团开设“田部达达拉之家”，目的在于让始于室町时代的达达拉制铁技术再次复兴和山区振兴，以制铁为轴心，同时开展农业、旅游、餐饮、住宿等多元化产业经营，致力于建设充满活力的地区社会以及食材能够完全自给的社区。

从过去到现在，以“田部长右卫门”之名传承至今的责任和精神从未改变。田部家族的历史不仅关乎达达拉制铁这一历史产业，作为扎根于云南市吉田町的遗产未来也将继续传承下去。

关于田部家族的历史还有很多值得被讲述的故事。请一定前往当地，与观光志愿者导游一起漫步游览，感受它的魅力和故事吧！

家の地域への姿勢を示しています。

さらに、火災によって自邸と周辺地域が焼失した際には、自らの住まいの再建を後回しにし、地域全体の復興を優先しました。そのため、桜井家や絲原家の邸宅と比較すると、田部家住宅は比較的質素に見えます。こうした姿勢は、現在も残る田部家土蔵群の建築に表れており、地域の安定と再生を第一に考えてきた田部家の価値観を今に伝えています。

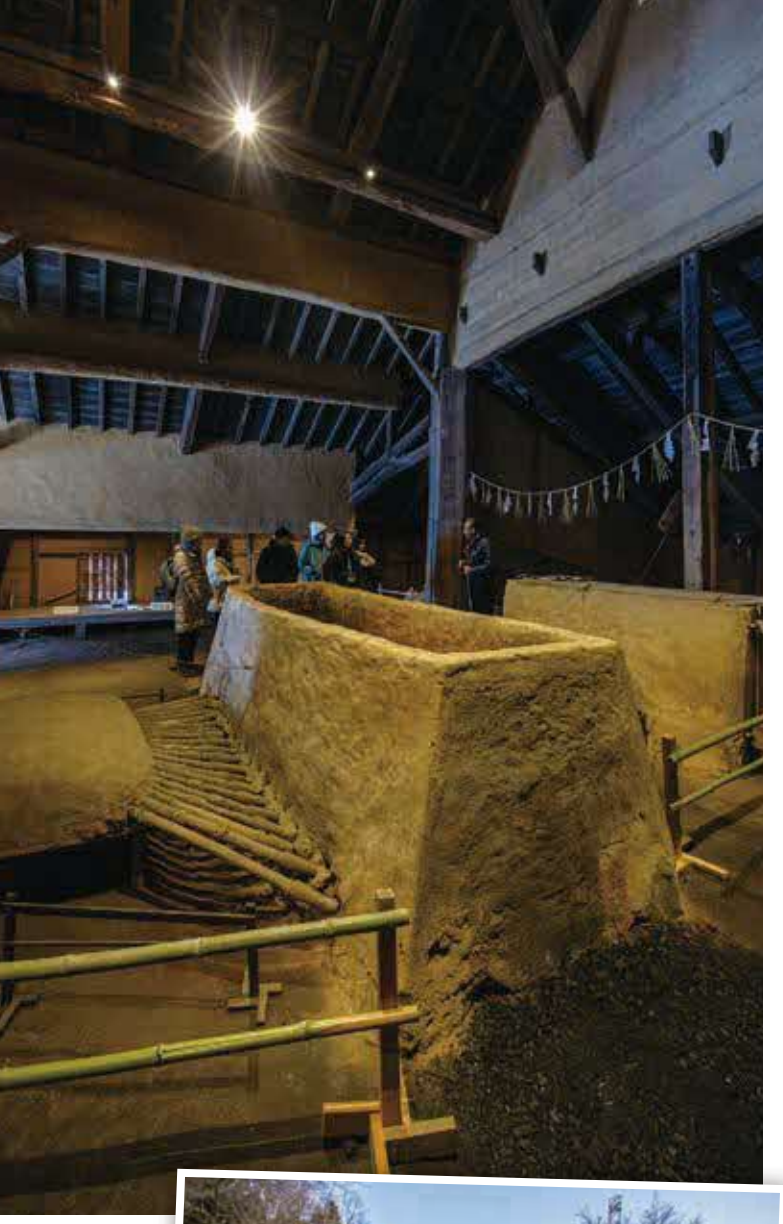
たたらの精神は、今でも地域の風習の中に息づいています。田部家では、約350年にわたり、毎年正月にこの地域独自の餅つきが行われてきました。この餅つきでは、餅に直接手を触れず、手水も用いず、すべて道具を使って作業を行います。これは、湿気や水分を嫌うたたら製鉄の性質に由来するものです。古くから伝わる餅つき唄と威勢の良い掛け声のもと、大勢で杵を上下に振り下ろす独特の方法で、五斗五升の餅がつき上げられます。清浄さや素材を丁寧に扱う姿勢といった、たたら製鉄に通じる価値観が、この風習の中に受け継がれています。

たたらの火が消えてから約100年。一度は途絶えた「たたら文化」を未来へ継承し、かつてたたらで栄えたこの地に再び光を当てるため、田部家は、たたら製鉄の精神を現代に蘇らせる取り組みを始めました。

2021年、田部グループは「たなべたたらの里」を設立しました。室町時代から続くたたら製鉄の復興と里山再生を目的に、製鉄を軸としながら、農業・観光・飲食・宿泊など多角的な事業を展開しています。地域の活性化と、食料自給率100％を目指す自立したコミュニティの構築に取り組んでいます。

過去から現在へと、「田部長右衛門」の名のもとで受け継がれてきた責任と精神。田部家の歩みは、たたら製鉄を単なる歴史産業ではなく、雲南市吉田町に根ざした生きた遺産として未来へとつないでいく物語そのものです。

田部家の歴史には、ここでは紹介しきれない数多くのエピソードがあります。ぜひ現地を訪れ、観光ボランティアガイドとともに歩きながら、その魅力と物語を体感してみてください。



在菅谷达达拉高殿聆听历史的回响

袁帅

乘车沿着云南市吉田町的山路蜿蜒而上，视野在林木间逐渐开阔，菅谷达达拉高殿终于映入眼帘。这座高殿是日本现存唯一的一座达达拉制铁高殿。达达拉（tatara）是一种将砂铁与木炭一同燃烧、冶炼成铁的日本传统制铁技术。设有达达拉炼铁炉的建筑被称为“高殿”，是制铁作业的核心设施。围绕高殿，工匠们在此生活、劳作，逐渐形成了名为“山内”的聚落。菅谷达达拉山内，正是云南市达达拉制铁全盛时期铁师大家族——田部家所拥有的重要产业之一。

抵达时，菅谷达达拉山内生活传承馆馆长朝日光男先生已在高殿前等候，准备带领我们开启一段穿越历史的旅程。高殿入口前方，伫立着一棵高大的桂树。相传掌管铁的女神“金屋子神”正是乘白鹭降临于桂树之上，因此在达达拉高殿附近常会种植桂树。进入四月，这棵桂树抽出新芽，在阳光照射下泛起一片深红，恰似炼铁炉中跃动的火焰。高殿周围，管理设施、生产设施与生活设施分布其间，整体格局仍保留着明治时期的样貌。

几日前这里刚下过一场大雪，高殿屋顶的积雪尚未完全融化。融化的雪水一滴一滴落下，仿佛为高殿垂下了一道雨帘。我们穿过这层雨帘，走进高殿内部。殿内阴暗而湿冷，待眼睛逐渐适应光线后，达达拉制铁最核心的部分——炼铁炉，出现在眼前。朝日馆长为我们详细讲解了达达拉制铁的全过程。

菅谷たたら高殿で、歴史の響きに耳を澄ます

袁　帥

雲南市吉田町の山道を車でくねくねと登っていくと、やがて菅谷たたら高殿の姿が現れます。この高殿は、日本に現存する唯一のたたら製鉄高殿です。たたら製鉄とは、砂鉄と木炭を燃焼させて鉄を作り出す日本古来の製鉄法のことです。たたらの中心をなす土炉の覆屋を「高殿」と呼ばれます。高殿を中心に職人たちが生活し、作業を行うことで、「山内」と呼ばれる集落が形成されていきました。菅谷たたら山内は、雲南市におけるたたら製鉄最盛期、鉄師の名門・田部家が所有していた重要な拠点の一つです。

到着すると、菅谷たたら山内生活伝承館の館長である朝日光男さんが、すでに高殿前で私たちを待っており、歴史の旅へと案内してくださる準備をしていました。高殿の入口前には、一本の桂の木がそびえ立っています。鉄を司る女神・金屋子神は、白鷺に乗って桂の木に降り立ったと伝えられており、そのため、たたら場の周囲には桂が植えられることが多いとされています。四月になると、この桂は芽吹き、夕日を浴びて赤く染まり、まるで炉の中で揺らめく炎のように見えます。高殿の周囲には、管理施設、生産施設、生活施設が配置され、江戸時代の景観が今も大切に保たれています。

数日前に降った大雪の名残が、高殿の屋根にまだ残っていました。溶け出した雪解け水が一滴一滴と落ち、まるで高殿に雨の帳を垂らしているかのようです。その雨をくぐり抜け、私たちは高殿の内部へと足を踏み入れました。中は薄暗く、ひんやりとした空気に包まれています。目が次第に慣れてくると、たたら製鉄の核心である炉が姿を現しました。朝日館長は、たたら製鉄の工程を一つひとつ丁寧に説明してくださいました。

たたら製鉄に欠かせない原料は、砂鉄と木炭です。奥出雲地方には良質な砂鉄を含む花崗岩の山々が広く分布しており、木炭の原料となる森林資源にも恵まれています。菅谷たたら山内は、まさにそのような自然環境の中に位置しています。さらに、菅谷川と吉田川が合流することで生まれる風の通り道が、高殿内の送風に重要な役割を果たしていました。立地条件の面から見ても、菅谷たたら高殿は非常に恵まれた場所にあったと言えます。

職人たちは砂鉄を採るために山肌を切り崩した土砂を流水で洗い流し、川に沿って流しました。砂鉄は通常の土よりも重いため、次第に川底に沈殿していきます。こうして集められた砂鉄は乾燥させた後、高殿へと運ばれました。あらかじめ焼いておいた木炭を炉に入れて火をつけ、十分に炉を温めたのち、砂鉄を投入します。木炭と砂鉄を交互に、何層にも重ねていくことで、最終的に「鉧（けら）」と呼ばれる大きな鉄の塊が生み出されます。

この一連の工程において、技術責任者である「村下」は極めて重要な存在であ

达达拉制铁最重要的两种原料是砂铁与木炭。奥出云地区广泛分布着富含优质砂铁的花岗岩，同时也拥有可供燃料使用的广阔森林。菅谷达达拉山内正坐落于这样的山林之间。菅谷河与吉田河在此交汇，形成天然的风口，为高殿内的制铁作业提供了重要的风力条件。菅谷达达拉高殿在选址上可谓得天独厚。

工人们将凿取的山土置于流水中反复淘洗，顺着河道向下流淌。由于砂铁比普通泥土更为沉重，便会逐渐沉淀下来。收集到的砂铁经过晾晒、去除水分后，被运往高殿。炼铁开始前，需将提前烧制好的木炭放入炉中点燃、预热。当炉温达到一定程度后，便加入砂铁，再反复交替投入木炭与砂铁，一层层堆积，最终形成被称为“鎚 (kera)”的巨大铁块。

在这一过程中，技师长“村下”是至关重要的存在，堪称达达拉制铁的灵魂人物。历代村下完全依靠自身的五感与经验，通过观察炉中火焰的颜色、温度与高度，判断加入砂铁与木炭的时机与分量。朝日馆长介绍说，村下所掌握的制铁技艺从不外传，只传给家族中的长子。与此同时，操作脚踏风箱也是制铁过程中不可或缺的劳动环节。宫崎骏导演的作品《幽灵公主》中，曾描绘女性踩踏风箱制铁的场景，但在现实中的达达拉制铁作业里，风箱工人只能由男性担任。一次完整的制铁过程，从向炉中投入第一筐木炭开始，到最终炼出鎚铁，需要连续三天三夜不间断地操作，是极为艰苦的劳动。

听到这里，眼前仿佛浮现出一幅画面：土制炼铁炉居于中央，炉内火焰翻腾；两位村下分别站在炉头与炉尾，目光紧紧盯着炉中的变化；两侧的脚踏风箱旁，各站着一名工人，奋力踩踏，汗水顺着脸颊不断滑落。

山、林、风、水，再加上匠人们的智慧与汗水，共同书写了人类产业史上一段厚重而深刻的篇章。随着时代推移，达达拉制铁逐渐被西洋制铁技术所取代，曾经昼夜不息的高殿也归于沉寂。但因为日本传统工艺品日本刀的制作依然需要只有达达拉技术才能制成的玉刚，达达拉的火焰至今还在燃烧。

站在今天回望这座高殿，它已不仅仅是一处遗迹或展示设施，而是一种将自然与人类智慧紧密相连的象征。那曾经在黑暗中燃烧了三天三夜的炉火，仿佛仍在静静诉说着人与自然协作、与时间对话的故事。历史并未远去，它只是换了一种方式，在这片山林之间，持续回响。

り、たたら製鉄の要とも言える人物です。歴代の村下は、炉の炎の色や高さ、温度を勘と経験だけで読み取り、砂鉄や木炭を加えるタイミングと量を判断してきました。その技は門外不出とされ、家族の長男のみに受け継がれてきたといいます。また、天秤ふいごの操作も欠かせない重労働でした。宮崎駿監督の『もののけ姫』では、女性たちがふいごを踏む場面が描かれていますが、実際のたたら製鉄では、ふいご作業を担当できるのは男性に限られていました。一回の操業は、最初の木炭を投入してから鎚が完成するまで、三日三晩休みなく続く、非常に過酷な作業だったそうです。

説明を聞くうちに、自然と一つの光景が思い浮かびました。土で築かれた炉の中央で炎が激しく燃え上がり、炉の両端には二人の村下が立ち、鋭い眼差しで炎の様子を見つめています。両脇のふいごには作業者が立ち、全身に汗をにじませながら、懸命に踏み続けています。

山、森、風、水、そして職人たちの知恵と苦労。それらが重なり合い、人類の産業史に深く刻まれる一章が生み出されました。時代の流れとともに、たたら製鉄は西洋式製鉄技術に取って代わられていきましたが、日本刀の製作に欠かせない玉鋼は、今なおたたら製鉄によってのみ生み出されています。その意味で、たたらの炎は今でも燃え続いています。

今日、この高殿を前にすると、そこは単なる史跡や展示施設ではなく、自然と人間の知恵が結びついた象徴のように感じられます。かつて三日三晩燃え続けた炉の炎は、今もなお静かに語りかけてきます。人が自然と向き合い、時間と対話してきたその記憶は、この山あいで確かに響き続けているのです。

A magazine about
Shimane Prefecture, Japan http://www.pref.shimane.lg.jp/bunkakokusai/
梦之港 编辑：郭小轩、袁帅
Publisher: 岛根县环境生活部文化国际课
关于本杂志，您有任何意见或疑问请与我们联系。
bunka-kokusai@pref.shimane.lg.jp
发行：岛根县环境生活部文化国际课

Bianca Chan

Guo Xiaoxuan

Carolina M Miura

Park Seoyeon

Yuan Shuai